

## 熊本大学学術リポジトリ

### Kumamoto University Repository System

Title	雑報
Author(s)	
Citation	龍南, 182: 55-71
Issue date	1922-07
Type	Departmental Bulletin Paper
URL	<a href="http://hdl.handle.net/2298/7864">http://hdl.handle.net/2298/7864</a>
Right	

## 二月四日卒業生告別式に於て

## 送別ノ辭

星霜茲ニ一轉シテ龍南今ヤ敬愛スル三百ノ諸兄ヲ送ラントス。會フ者ハ必ズ離ル、ノ習、諸行ノ無常又タ何チカ喜ビ何チカ悲マンヤ。然リト雖モ思フ潜メテ夫ノ天地ノ茫々ト人生ノ須臾ナルトヲ觀ズルトキ、名モ淨キ龍南ニ於ケル諸兄ト吾人トノ去來ヤ、ソモ何人カ之ヲ悠々タル行路ノ心ニ擬シ得ル者ゾ。

過ギニシ三年ノ歲月モ之チ天地ノ悠久ニ比スレバ僅カニ一瞬ノ間ノミ、然レドモ人生ノ花タル青年ニ於テ此ノ三年ヤ思ヘバ又タ貴重ナル光陰ナリシニ非ズヤ。今相離ル、コト百里ノ山河モ之チ宇宙ノ廣大ニ比シテハ尙ホ一葦ノ隔ニ過ギザルベシ、然レドモ此ノ一葦ノ差、ヤガテ諸兄ト龍南ノ地ヲ距テントスルコトヲ思フトキ誰カ胸中一片ノ感慨無クシテ可ナラシヤ。吾人不肖諸兄ノ誘掖ニ遭ヒ共ニ與ニ理想ニ滿チ熱血ニ燃エテ契リニシ意氣ノ交、思ヘバ樂シキ過去ナリキ。然リ三年ノ歲月、龍南ノ天地恐ラクハ是レ諸兄生涯ノ回想トナリ又吾人永遠ノ追憶トナラン。此ノ諸兄ト吾人

ト今茲ニ遠ク相別レントス、吾人ノ衷情戀々トシテ思慕禁ゼザルモ誠ニ已ムヲ得ザルナリ夫レ然リト雖モ、飄テ世界ノ大勢ヲ見ルニ時代ハ寔ニ幾多ノ人傑ヲ要望ス。有爲ナル諸兄リ前途ハ猶ホ洋々タル大海ノ如キカ。龍南ノ天地ニ養ハレタル一道ノ正氣ハ今當ニ天下ニ向ツテ磅礴セラレザルベカラズ、是レ實ニ我が龍南ノ負フ使命ニ外ナラザレバナリ。茲ニ於テカ吾人モ悅シテ諸兄ノ爲ニ滿腔ノ誠意ヲ捧グ以テ其ノ首途ヲ祝ハン哉。敬愛スル諸兄ヨ、請フ心ヲ安ンジテ往ケ、諸兄ノ愛スル龍南ハ年移リ人變ルト雖モ庶幾クハ巍々タル蘇山ノ雄姿ト共ニ永ヘニ儼トシテ易ルコト無クム。而シテ又諸兄モ今山河百里ヲ距ツト雖モモ、願クハ永クニ愛スル龍南ヲ忘ル、コト莫ク、三年養ヒ得シ王高魂ヲシテ更ニ一層ノ光輝アラシメラレンコトヲ。噫諸兄ヨ、果シテ斯ノ如クンバ諸兄ノ往ク處假令天涯萬里ヲ窮ムト雖モ尙是レ人間到ル處ニ我が龍南アランカ。

聊カ蕪辭ヲ陳シ、龍南ノ名ニ於テ敬ンテ光榮アル諸兄ノ卒業ヲ送ル。

# 英國皇太子殿下歡迎 學生大會參列報告

四月十四日 總務委員兩名本校代表トシテ大  
會參列ノ命ヲ受ク

十六日 午前三時餘上熊本驛發

十七日 午後一時餘東京驛着文部省ニ出頭諸  
事承合

十八日 午後日比谷公園ニ集合、全四時 殿  
下御臨場、歡迎文捧呈、御答辭、學生幹  
部ニ握手ヲ賜フ、演武五時頃終了

全夜文部省ニ於テ地方代表者茶話會ニ列  
席

十九日 午前八時半ヨリ代表一同宮城拜觀ヲ  
許サル

午後五時東京驛發

二十一日 午前二時上熊本驛着歸校

四月二十一日 本會役員會に於て議決せる所  
左の通り

- 一、通常會員ハ對七高野球並ニ陸上競技仕  
合應援費トシテ第一及第二學期各金一圓  
宛テ出金スルコト
- 一、通常會員ハ京都遠征選手、補助追加ト

シテ第一學期金五十錢宛テ出金スルコト  
一、前二項ノ出金ハ各學期授業料納附期日  
ニ於テ本校會計課ニ納付スルコト  
一、第一項ニ關スル支出豫算ハ更ニ後日チ  
期シ役員會議ニ附シテ決スルコト

## 端 艇 部 報

### 端艇競漕習記事

幾月の風霜に鍛へた腕を抱きしめて振りつめ  
た思ひを胸に幾多の選手がひたすらに望をか  
けた第一日曜七日が曉天の降雨に沮まれて中  
止を餘儀なくされたのは人も吾も残念至極で  
あつた。

五月八日 朝來の霧霽れて天氣清朗微風だも  
無い。豫定の十時に後る、こゝ三十分、波靜か  
な湖面を破つて第一回の試漕が行はれる。

準備に若干の手落はあつたもの、役員各位其  
の他の熱心な御盡力によつて極めて順調に運  
び、よく整つて而も最も緊張したレースを行  
ひ得たことを深く感謝して已まない。又クラ  
スレース出場者が二十九組の多數に上つたこ  
とは稀に見る盛會であつたと思ふ。殊に選手

競漕一着タイムは從來曾て無い最高記録を作  
つたのであるといふ。龍南史上に特筆せれば  
ならぬ成績左の通り。(五月八日於下江津湖)

回 着 年 組 手 調整 番 番 手  
次 順 組 手 調 番 番 手

一着タイム(往復七百米)

1 試 漕 (午前十時三十分開始) (五十分  
五秒?)

2 3 2 1 理 乙 一 木 三 清 津 岩 四分二  
文 一 一 (着) 屋 木 川 見 崎 半 十七秒

3 3 2 1 理 乙 一 大 宮 安 野 長 四分五  
文 一 一 (着) 鐘 島 松 村 半 十三秒

4 3 2 1 理 乙 一 龍 小 時 緒 上 四分八  
文 一 一 (着) 旗 枝 方 田 半 十七秒

5 3 2 1 理 乙 一 右 月 黄 中 内 四分四  
文 一 一 (着) 光 川 村 藤 十六秒

6 3 2 1 理 乙 一 石 菊 辻 野 倉 四分二  
文 一 一 (着) 川 本 中 橋 十二秒

7 第二選手五分間競漕 五分七秒

8 3 2 1 理 乙 一 洞 大 泰 伊 西 四分五  
文 一 一 (着) 島 藤 尾 十八秒

9 第二選手五分間競漕 五分四十三秒

10 文三一 藤劍佐小竹 四分五  
理三二 村木藤橋原半 十一秒  
理三二

11 文三二 松吉横吉藤 四分二  
理三一 本村尾海 十六秒  
文三三

12 理三二 古吉立橋竹 四分二  
理三三 賀田花本内 十三秒  
文三三

13 理三乙 植近大家梶 四分二  
1 文三一 松森保永 十秒  
2

休憩 (午後三時三十分再開)

14 廣木青年 建川島建川 四分九  
2 上無田同 川元本川元 秒半  
3 專賣局同

15 廣木青年 松其川川 四分七  
1 上無田同 本川上上上 秒  
2 專賣局同

16 職員競漕 (着二) 山田本五 五分二  
(着二) 岡飯池今小 十一秒  
(着二) 上島田村川

應援團示威運動

17 對科第二選手競漕 (午後五時四十分)  
一着 文科(青)ニコース 四分八秒五  
二着 理科(赤)ニコース 分ノ二

優勝旗返還式(午後六時)

18 對科第一選手競漕(午後六時二十分)

一着 文科(青)ニコース 三分五十八  
二着 理科(赤)ニコース 秒五分ノ三

優勝旗授與式(午後六時三十分終了)

十六回職員競漕が済むと兩軍應援團は交々應援歌を高唱して堂々たる示威運動を始める、意氣衝天眞に壯觀である。兩軍再び別れて定位に着くと五時兩科第二選手は急遽の様な拍手に迎へられて乗艇と相次いで審判船に就き競装の検査を受ける、衆目期せずして一點に集められた。四十分勇ましくスタートを切る往路は青が遅れ勝ちに見えたけれど歸路の力漕効を奏して遂に勝は先づ文科に歸した、此の差艇身半。間も無く光榮ある優勝旗は前年來の勝者理科の第一選手の手に捧げられて現はれた。牙はたガールの運びが靜かに水面を切つて、二十年の歴史を飾る紫紺の優勝旗が色も褪せた總紐を靡かせつゝゆるやかな圓を湖面に描いて會長席に捧げられる迄、拍手の音と奏樂の響きは相和して満場を壓するのであつた。文科の第一選手も艇に乗り込んで共に競装検査を了へ、六時を過ぎる數分、愈々夫れゝ所定の出發ゴールに着いた。此の時

しも暗雲俄かに起つて、隙洩る斜陽の色も凄慘の氣漲るばかり、選手の眉宇は何れも決意の色たらぬはない。平塚審判長の發砲によつて美事なスタートは切られ、赤の急漕忽ち一艇身許りも抜く見えたが、廻航點には殆ど同着、廻航で赤稍々遅れ、歸路は青の力漕愈々猛烈を加へ、遂に三分五十八秒餘といふ天晴れのレコードを作つて轟然決勝線に入つた差二艇身半。文科の應援團は狂喜して船から水中に飛び込んだ者も多い。優勝旗が文科の選手に授けられて黃昏の色湖面にさまよふ頃會は終りを告げた。理科の應援團は堂々熱烈なる「武夫原頭」を高誦して引揚げた。龍南の意氣、誰しも同じ思に涙くまざるを得ないのであつた。

對科競漕陣容左の如し。

第一選手(メンバー順)

文科 三ノ三井上 冬次 三ノ一中島 徹夫  
三ノ一許斐 敏 一ノ二浦崎 猛

理科 三ノ三重藤 文夫 三ノ一内田 幸夫  
三ノ一佐々木 求 一ノ乙清田 真忠

二ノ乙村上 敦  
二ノ乙菊川 三男

第二選手(同右)

文科	二ノ一榑本	輝義	三ノ一阿賀	正美
	一ノ一江藤	夏雄	一ノ一平尾	正民
理科	三ノ一荒牧敬三	土		
	三ノ乙佐々木	計	二ノ一井闕	敏則
	三ノ三那波	寛	二ノ一栢植	伊作
	二ノ乙松下	仙次		
應援團長				
文科	三ノ三	古	閑	潔
理科	三ノ乙	鹽	塚	重藏

(以上總務委員)

1 Von Newton zu Einstein  
S.3.B. M. Kato

1 A Platitude of an Ass  
1-2.B. K. Miyoshi

1 Seien Sie Begeistert!  
1-3.B. N. Nakamura

1 Dream or Fact? 1-3.A. A. Mishiro

1 Der Entwicklungsgang der Japanische  
Medizin Dr. Hütthner

1 Eyes and Ears in falan  
Prof. W.N. Potter

1 Die Schlussrede 1-2.A. Abe

一、開會之辭  
 一、生活之理想化  
 一、醫人  
 一、人類的運命  
 一、人生  
 一、狂熱之世界  
 一、戀愛の本質價値とその崇高化

文三、甲 三城、梶雄君  
 理三、乙 加藤、正和君  
 文三、甲 木村、三藏君  
 文三、甲 廣高、安平君  
 文三、甲 松村、基樹君

大正十年十二月十三日(日)於縣會議事堂  
 (岡上教頭、西川教授來會)

◎公開大演說會

## 山岳部報

とせねばなるまい。爾來開演說會は龍南三年眞面目に思索こらした思想發表と公開的演說の修練のために開かれるもので多く三年生のみだつたが本年も其の意味で振はない振はないこの評を得てゐる我部も此れ等辯士を有するからには決して悲觀すべきものではないと思ふ。皆相當に思想に於て演說振りに於て恥づかしくないものばかりであつたが殊に澁谷君は會の最後をお願いして好適だつたと思ふものである。内客に就いては蛇足はつけないことにしよう。

公開演說會を開く毎に自分は思ふ。もつと自由な思索發表を許して普通の聴衆に十分徹底するやうな問題——それには多少時事問題にも觸れ今少し通俗的にする必要がありはしないか。勿論余程の注意は要するが。是は學生各自十分なる自覺と學校當局の積極的理解に待たなければならぬ事である。終りに我龍南會各部の邁進的發展を祈り。殊に演說部の隆興は新しい校長の下に立つ新委員に多大の期待を以て筆を擱きたいと思ふ。

一九二二、一、廿一、(ダブルA)

昨年夏からの部報を左に誌す。

△恒例による夏期山岳旅行の計畫は昨年度は日本アルプス、朝鮮、四國の三方面に向つて立てられた。そのうち四國旅行がリーダーの事故のため中止のやむなきに至つたのは残念であつたが、其他の二班は至極順調に日程の遂行に非常な成功を収めた。殊にアルプス方面の参加者は十餘名に達し、在來にない新例を開いた、一般に年を追ふて、眞面目な愛岳熱が高まりつゝある様子があるのは吾々山岳黨の大いに意を強うするところである。左に其の概畧を記さう。

理三甲一 井上八郎右衛門

### 第一班 日本アルプス方面

七月二十日 晴

松本—中房温泉

天氣晴朗にして最好の登山日和である、一行十名は旅裝凜々しく午前九時五十分信濃鐵道にて松本を發し有明驛にて下車し直ちに中房温泉に向ふ、強い眞晝の日光を浴びて垣々砥の如き田舎道をたどるゝと約一里半にして中

房川に會す。文字通りに水色をたし流を見れば今迄の暑さも一時に忘れ河原に下りて辨當を食ふことにした。道はこれより少し勾配をもつてくる、中房川に沿つて進む發電所を顧

る頃より道は棧道となる、見下るせば數十丈も下と思はれる所を青い谷川が凄まじい音を立て、流れてゐる、右手には有明山が聳ゐるので、谷間は暗い、それが一層谷を深く見せさせる、蛸や竹烏の賑やかな聲に山氣分が表はれ治める、信濃坂附近より道は流に接し釣橋を渡つてしばらく行くさや、開いた所に出る即ち中房温泉である、時に五時、直ちに温泉に入り休養す、夜おそくなつて案内者を得て大休の模様をきく。

七月二十一日 晴

中房温泉—燕岳(二七六三米)—大天井岳

(二九二二米)—常念坊

三時頃から出發の準備にそりかゝつてゐる者もある、一行が立つたのは七時四十分であつた、今日は最も苦しい日と豫想されてゐる、温泉から西に登る樹木多く眺望なく勾配甚だ急にして喘ぎ喘ぎ魚貫して登る、途中に二三回休み約二時間半にして森林帯をはなれると急に眺望が開け雲間遠く淺間の墳煙が見ゆる

つはくろ

この尾根をこせば眼前に燕岳の雪景が目ざむるばかりあざやかに青空に對して谷をへだて、現はれた、こゝで初めて雪にあひ咽をうるほしながら、燕追分に着く、こゝにくれば飛彈方面の山々が手にさる様に見ゆる、すぐ前は高瀬の峡谷でそれをへだて、見ゆる硫黄岳、五郎岳、烏帽子岳等が丁度まだらな牛皮の様な姿を示してゐる、南には憧憬の的槍岳が霧間に隠顯してゐる、荷物を置いて燕頂上に行く、此處からは北アルプスの諸山がよく見ゆる、立山、針木雪溪等が先づ目を引く、遠い西空には雲耶山耶雲烟縹緲として天地一体となつて居るのが見ゆる、やがて追分に引きかへし辨當を取る、十二時十五分常念山脈を尾根傳いに南下す、右に飛彈諸山左に八ヶ嶽淺間の諸山、松本平野、前方に槍、大天井等をのぞみながら足下には白や黄赤や紫造化の妙を誇るお花畑、岩根に淋しく咲く駒草など見ながら蛙岩、爲右衛門吊岩を過ぎ切通岩の絶壁を下り直ちに大天井嶽の急勾配にかゝる頂上についたのは二時半であつた、槍岳が呼べば答ふる位近くに見ゆる、寫眞など容易されたがどうしても霧がされない、寒くなつたので下ることにした、根松を踏み分けながら

悠々せまらぬ大空の下を長閑な山氣分に包まれて足を進ませた、人住まぬ二俣小屋を見過して、東天井岳に登る、霧は霽れ眺望が開けたのでしばらく休む、四時出發、風は治まつて漸く夕べの雲現はれ靜かに暮れゆく遠山の景夕日に變り行く雪溪の色とこはなしにせまつて来る高山の冷氣を感じながら道を急いだ、常念坊に着いたのは五時半であつた、これは鞍部にあつて、西には恐ろしい様な穂高の大雪溪、東には遠く淺間、八ヶ嶽の諸山又平和の姿を示し眠るが如く紫雲の中に消へ去つて、一陣の雪風来る東には物凄く澄み渡つた月が靜々と登つて来る。

七月二十三日 晴後雨

常念岳(二七五七米)槍澤小屋

二時頃から準備を始むる客もある、三時頃起きて燦る圍爐裏の傍で涙を拭いながら、夜の明けるのを待つた。やがて空が白んで来るに御來光を拜せん、常念岳に登りはじむる、有明の月は張紙細工の様に西の空に愈るさうにかゝつて居る、總べての崇高さをコンデンスした様な太陽は活動そのもの、様に旋轉しつゝある紅の焔に包まれて勢よく東の空から飛びだした、西に見ゆる穂高の雪溪は崇高なパ

ーブルに輝いて總べての俗念を威壓してゐる頂上についた頃は日は早や高く昇つてゐた、下る時は石轉を飛び樞松をすべつて下る、小屋について朝飯を終つて出發したのが八時半であつた、先づ一ノ俣谷に出た、昨日は終日水らしい水を得なかつたのでこの谷で洗面しなごしてしばし休み次で少し下り中山を横切つて二ノ俣谷に出た、今日の行程は少ないと云ふので、こゝでしばらく休んだ、やがて、これを下り河原で、辨當をはじめたが雨が降り出した、辨當の終る頃には随分はげしくなつた、油紙に身を蔽ひ滑る道を踏みしめながら次の合流點迄下り右に打れて、赤澤の方に道をさつた、赤澤小屋岩を左に見て間もなく、槍澤小屋に着いた。時は十二時四十五分であつた、雨はや、小降りになり、まもなくやんだ、燃木の煙る爐邊に服を乾かし餘る時をトランブに費し或は散歩に費した。

七月二十三日 曇、雨

槍ヶ岳(三二七九米)―上高地

三時頃から起きて朝飯を急ぎ食し槍ヶ岳に向ふ例年より雪が多いこのことで小屋を出るにすぐ雪溪にかかつた雪は溪に満ち厚さ數十尺表面は風の爲め波狀を呈してゐる、滑る所を一

本の杖に全身を委れて一歩一歩と踏みしめながら登つて行く頂上は起つては消え消えては起る霧のため或は遠く或は近く數尺の眼前に現はるるかと思へば又影も形もなく消え去るやがて麗の鞍部につく西には谷をへだてて其の名の様に赤い赤嶽がはつきり見えてある杖を置いて愈々待ち焦れた槍の穂先へと登りはじめたさりとつくなき岩角では足の爪先で全身を託し殆ど直立と思はる、岩壁は手指一二本に頼り手足の指も叶はぬ所は細い一條の針金に頼る、浮世の繩べての慾望、喜怒、哀樂も全身の運命も只一本の針金の安否によつて天さもなれば地さも變る此一瞬こそ思ひ出しても恐ろしい。又痛快であつた頂上は約二十四五人を容るゝ位である、一歩あやまれば千尋の谷、蹴落された石は驚の音をたて、奈落の底へと落ちてゆく、折悪しく次から次に起る霧のため充分の眺望がきかないのは、残念であつた、唯時々霧間に遠山の雪が見ゆる、寒くなつたので下ることにした。鞍部で一休み、お得意の五萬ダンスを始めた頂上でやつた時は恐ろしくやつたが、今度こそは踊り踏つて倒れる迄踊つた、歸りには雪どおり、是亦痛快の一つであつた、恐ろしい様な急勾

配の雪溪をかれて持つて來た、莫産を尻に敷き杖をブレーキにして純白の雪を蹴立て、迂るアツと云ふ間に二二町下つてしまふ莫産は破れ服も濡れ寒さが肌に迫つてもどうしてこの痛快が忘れられよう、又しても少少の勾配があれば、迂つて見る、かくして登りに喘ぎつゝ、登つた道も夢の間に下つてしまふた、小屋に歸つて晝飯を終つて出發したのが十二時であつた、これからの道は樂である、たゞ梓川に沿ふて下るばかりである。紺碧の淵にかけられた丸木橋を渡る時なご一寸恐ろしい様な所もあつた、降りす降らずみの空を窺ひながら林道を急いで徳澤の牧場に着いた、西にば梓川の真白な河原を林の間にのぞみ北東南の三方は高い峰にかこまれまばらの林の中を三々五々或は歩き或は伏す牛馬の群しめやかに降る雨何れも實に長閑な平和な世界を形成してゐる、牛馬はよく人に慣れ觸つても乗つても靜かにしてゐる、此處でしばらく休んだが雨が降り出したので道を急いだ濡鼠の姿で五千尺旅館に着いたのは、四時廿五分であつたが、天氣の勢で随分遅い様な氣がした、家は梓川にのぞみ河童橋の袂にあつて南には焼岳の烟がぼんやりと見ゆる、西には恐ろしい様

な穂高が崇高に聳へ中凹の大雪溪がちつぽけな人間を威壓する様に眼前に展開してゐる、あたりは一面有名な神河内森林でその長閑な様はげに神のやすらふ姿にして流石に國立公園の候補地として、第一に覗まれたのも故あることである。

七月二十四日 雨後晴

上高地―徳本峠―島々―松本。

今日は最も危険視されてゐる穂高嶽(三〇九〇米)を突破せんものゝ三時に起きたが雨である、準備は出来ても雨は止まない、案内者はさてもこの雨では二三日は登られないと宣言した甚だ残念である、雨は強くなるばかりである、夜は明けても雨は強くなるばかり終に下山説、滞在説、焼岳登山説が出たが後二者は種々の理由のもとに破れ下山説が勝を得た、嬉しそうに、残念そうに五千尺を出たのは八時であつた、徳本峠に着いたのは十時頃であつた、雨は弱くなつた、穂高、梓川が最後の優姿を惜まず現はしてくれた忘れられぬ日本アルプス、穂高槍の隙今は最後と名残り惜とさうに別れをつけて、島々谷の下りかゝつた、少し下つて水のある所に來て辨當を食つた、それから眺望なく殺風景な森林鐵道の



レールの中を黙々として急ぐこと約四里午後二時辛くも島々に着いた、ある紳士の好意によつて自動車をお願い松本へ走つた、今朝の強雨はこのことやら、此處では快晴、日本晴である、夏を忘れて寒さにふるむ様子は全く變つて暑い下界の風に「ン」云ふ煮ゆる様な蟬の聲を聞いてはなつかしげに過ぎ來し方なかへり見て槍の險雪じりの快なき語りあつて居る自動車はいつの間にか野麥街道五里を突破して飯田屋の前に止つた一應旅装をさいて開散コンパをやり夕方の汽車で前委員木下君を送つて他は二十五日の朝歸途につくことにした。

## 第二班 朝鮮方面 縫員三名

七月十一日午前十時半下關出帆連絡船にて釜山へ向ふ。午後九時四十分釜山着、十一時發の汽車にて一路京城―元山へ向ふ。

七月十二日午前九時二十分龍山にて京元線に乗りかへ鐵原大平野を横ざり三防の嶺を過ぎて午後五時半元山着休憩の後九時出帆の船にて長篇へ志す。

七月十三日濃霧のため豫定よりおくれ午前九時長篇港に着き食事すまし十二時出發之

より徒歩にて二哩の路を横ざり午後一時半溫井里着溫泉に入りて明日の英氣を養ひ案内者をたのみて準備全くなる。

七月十四日(晴) 案内人を先頭に午前七時出立極樂嶺を踰へ神溪寺に至る之より普光庵を経奔流する溪流を度々左渡右渉して一頂台、王流洞を経て飛鳳瀑を過ぎ金剛山第一の九龍瀑に達す此間の里程二里二十丁之より急坂十八町を攀じて八潭の奇勝に至る見下せば綠を帯びし潭八個堂々として流る一時半歸途につき六時再び溫井里に歸る。

七月十五日(晴) 溫井里を發し寒霞溪に沿ひて上る事一里二十三町にて萬物相の關門たる萬相亭に達す之より溪流に沿ふ事二三町蟲々聳立せる奇岩左右に迫り來り三仙巖を見更に進で、王女峰の一角新萬物相を見眞に流汗一斗の苦なむ、再び亭に歸る此の往復三時間休憩の後出發し溫井嶺の嶺を越て細河に出平垣なる路を通りて未輝里にあやうく着く時に夜の十時半一軒の日本旅館に宿る。

七月十六日(雨) 仕方なく一日を休養に過す。

七月十七日(曇) 少雨にて早朝より悲觀せるに、十時頃少く晴る喜で直に出發長安寺に向

ひ十二時着す(二里半)晝食後僧の案内にて出發明鏡臺靈源庵を見再び途中より水簾洞に至る時間少きため望軍台の登攀はやめ引返す、六時長安寺につき禪寺の一室に一夜を過ごす

七月十八日(少雨) 最後の日なれば雨を冒して進む溪流に沿ひ鳴淵潭三佛巖、白華庵を経て表訓寺に至る約二十丁急坂をよじて正陽寺を見再び表訓寺に引返して萬瀑の本溪を廻行する事十八町にて摩訶衍に達す、此間普德庵、其他金剛八潭の絶景相次ぎ送迎に遠なし之より十五町の急坂を登りて白雲台の絶頂を極む之より歸路につき六時長安寺着、之にて金剛山見物は一先打切る。

七月十九日(曇) 朝八時自動車にて平康に向ふに自動車の故障續出し豫定よりおくる事五時間三十六里の間を八時間の長時間を費して四時平康に着すれど時おそく又やむなく之に一泊に決す。

七月二十日(曇) 朝七時半平康發十二時京城に歸る二時より市内見物をなし、商品陳列館、パコダ公園、青年會などを見て一泊。

七月二十一日(曇) 午前中景福宮に行き博物館(總督府)を見午後は李王家の秘苑の參觀を特別にゆるさる、其より博物館、動物園、植物

園を見て歸り夜は市中見物。

七月二十二日(曇) 朝八時仁川に及び仁川公園、樂港、觀測所、各縣公園を巡覽して再び京城に歸りて一泊す。  
之にて解散をなす。(橫山)

### 第三班 四國方面 (豫定)

#### 第一行

第一日 (七月十八日) 午后門司出帆。

第二日 伊豫高濱港着—松山—橫河原—黒森峠—笠方泊。

第三日 笠方—梅ヶ市—堂ヶ森(一六八九米)—二ノ森—石鎚山(凡二〇〇〇米)—

若山泊。

第四日 若山—土居—川口—越知泊。

第五日 越知—高知解散。

#### 第二行

第一日 (二十三日) 高知—繁藤—太田口泊。

第二日 太田口—<sup>おほはり</sup>大歩危—祖谷村善徳泊。

第三日 善徳—閑定—大枝—管生泊。

第四日 管生—劍山(一九五五米)—古見泊。

第五日 古見—貞光、解散。

△夏期旅行に先だち、對七高野球戦を機會に霧島登山を企づ。七月十一日熊本を出發し、

宮崎線の小驛加久藤に下車。その日、海拔七百米の白鳥温泉に俗腸を洗ふ。翌日強雨を冒じて大瀧池に攀ち、硫黄谷温泉に下る。翌日亦天候險惡、止むなく一行の多數は其日牧園に出たが、六七名は勇を鼓し風と雨とに闘ひつゝ、無事高千穂の絶嶺によち、南方國分に出た。最初の一行を三十五名であつた。

尙、此登山の紀行及び前記日本アルプスと朝鮮旅行の詳細な記録は當時、九州日々及九州新聞に連載した。

△九月二十三日 球摩川下り。

一行實に八十五名に達す。朝八時熊本發、球摩沿岸の風光を賞しつゝ、人吉着、直ちに河原に出て記念撮影をなし、大橋附近から正午愈々輕舟八艘に分乗して、玖磨の清流、所謂三十六瀬を、川風を切つて下つた。白石に舟を捨て、神瀬の岩戸(鐘乳洞)を見物、一行一日の歎をつくして薄暮歸熊した。

△九月二十九日 午後三時から集會所に小會を開く。西川、淺井兩先生を中心に、二十餘名の賑かな集りであつた。

△十月十日、十一日。

山岳展覽會を公開して一般の觀覽に供し、本館階下の二教室を以て會場に充てた。出品は

昨年三十周年紀念日に催された時のよりも豊富で、且精選されたもの許りであつたので非常な盛況を呈した。當日の主なる陳列品は、羚羊及雷鳥の剥製標本、白馬岳産、高山植物標本數十葉、日本山岳會藏版山岳寫真約百葉、九州山岳寫真四十葉、阿蘇山模型三種、高山植物圖、雜誌「山岳」約三十冊、其他の山岳に關する書籍數十冊及び登山用具等であつた。

△十月十五日及十六日。阿蘇登山。

集るもの十六名、明月を仰ぎつゝ、立野から栃木、湯ノ谷、千里ヶ濱を経て夜半山上神社に至る。噴火口を俯瞰し、翌朝坊中へ向つて下山。絶頂の日出は壯觀の極であつた。

## 弓術部報

○昨夏京都に於て先輩藤野兄の勞によつて七高と個人的興味のもとに練習試合を年二回位宛行らうといふ約が出来た。第一回は當方から行く事になつて、双方照會の上去る十月卅日に行はれる事になつた。

二九日午後急行で南下する。向山、吉町君を始め七高部員の出迎へを受けて校内の集會所に泊る。最初の出来るだけ、簡単にといふ約

東の主旨がら集最所の厄介になつた。

卅日。快晴。皆氣持のよきさうな風であつたが中りも當じて可なりであつた。鹿兒島特有さいふ式的(尺二八寸四寸の三的を接してかけたもの)の禮射に始まり金の一立次に十立の競射最後を兩軍入り混つての源平で終る。

式的は藤原と七高の吉田各乙矢を入る。金的は吉町落す。京都での慘敗は北處でその一部を償はねばならぬし第一回の試合には是非敵の印の金的を奪ひたかつた。最初の五立は三七本と二九本とでは我は優に敵を壓した。次の五立は氣の緩みか一本の差で勝ち越し合計として六二本と五三本とで我軍の勝。第一回目の金的は我が手に收められた。試合後兩高共に集會所で牛鍋を圍み談を交へ食後は更に案内せられてベルクへ登る。翌一朝再び諸兄に送られて汽車に投じた。車中金的は嬉しげな手つきで人々の間を巡る。茲に各人の中矢の數を掲げる。

五	高	七	高
藤原	十二本	平沼	三本
太田	十二本	鹿毛	九本
松本	十一本	吉田	十二本
古莊	十五本	川鍋	七本

中野 九本 島越 十一本

田中 三本 江藤 十一本

的は尺二中黒四寸。二十本。

○大正十年に入る。年が明けて先づ考へ出されるのは京都遠征の事である。

一月十九日廿日の兩日先輩町野一氏が歸郷の余暇をもつて、再度コーチに來て下さつた事は感謝に堪へない。次で卅日には町野氏の紹介で大里の佐々木先生が初めてあるにも拘らず、御尋ね被下つて一同を御教へ下さつた事は幸福とする所であつた。先生の言は一同を裨益する所少くなかつたと思ふ。吾々一同は先輩の厚遇に謝し奮闘して之に報ゐねばならぬ。佐々木氏を御待ちする爲に丁度廿九日に行はれた熊本専門學校間の試合には出る事が出来なかつたのは残念である。

## エスペラント會報

人が二人以上よると言葉が必要になつて來る。相手の用を辨するを云ふより自分自身の用を辨するためにだ。

一人を單位にして一國民族の必要の爲にその國語が發達して來た。そして其國語の發達

は其の民族の文明を産んだのであつた。近代の文明は尙一步を進めて國際化して來た。凡百ものが國際一致の傾向を取つて來た。人々が語らなければならぬ様に、一國と一國とは語らなければならぬ。民族と民族とは話さなければならぬ。人類はお互に相擁せなければならなくなつた。案に於て一國民族を單位として國際語の必要が生じて來た。其處で假りに強國の語、即ち英語とか佛語とか云ふものを借用して來たのである。然し何れにしても頗る困難を忍ばなければならぬ。見よ！我國の學校教育の狀態を。中學を。――現在高等學校を。今迄はそれでもうに進んで來たのだ。それはよりよい國際語がなかつたからだ。然し世は求めてゐる。人類は――恰も渴してゐる者が水を求めるやうに――切なる望を持つてゐた。人類は叩いた。そして――見よ！望の戸は開かれたのである。ロマン、ローランをして廿世紀の一大奇蹟だとか叫びしめた奇蹟ならざる奇蹟がザメンホフ氏によつて、齎されたのである。世界大戦争以來彼の縁の星の光は世界到る所に眞の平和眞の文明の望を示したのである。人類の淋しい不慣な、啞の様な生活に春が來たのだ。人

類がお互にほんさうに相擁し、相泣き、相笑ふ時が來たのだ。語らう！唱はう！躍らう！人類は始めて口が利ける様になつた。エスペラントは人類の言葉である。

エスペラントの特徴は何れの國民の國語でないこと。學習の容易なこと。發音の流暢なこと。表現の自在なことである。是が國際語でなくてはならぬ！

(今更多くを語る必要はあるまいと思ふ。左に我が五高エスペラント會——是は今の所決して完全なものではない。芽生はだ——の内容を記して見やう。)

何時か藤岡先生を訪問した時エスペラントのお話を聞いた事があつた。然し何だかわからなくて唯其名前だけ頭に殘つてゐた。其後友人近藤君がエスペラント協會に加入されてエスペラントの雜誌など取つてゐられた。其前書店ローターで前三部の杉森君がエスペラントの研究會を起さうではないかとの御話を承つてゐた。そして其處でエスペラント全程を買つたがまだ讀まずにゐた。其後杉森君は卒業せらるゝ、暫らく話が絶てゐたのだが藤岡先生や澤瀉先生が熱心に研究せられて大いに普及せられんさの意思あるを聞き、近藤

君と謀つて先づ宣傳の助けにも先生に講習をお願いしてやつて見やうと云ふことになり。三高や四高や七高などのエスペラント會の模様を聞き先づ昨年六月廿日に第一回宣傳的にざつと文法の話をする事にした。岡本教授が發音を、澤瀉教授が文法をそして、藤岡教授が讀譯をやつて下さつた。集るもの約二百名。

研究しやうと思ふ人が二十人もあれば十分ださのお話だつたのが約二百名、瑞邦館に一ぱいだつた。尤も好寄的に集まつた人も可なり多數あつたであらうが、如何に國際語と云ふものを欲してゐるかを知るに足るであらう。

それからもう試験も始まるからと云ふので獨習に適當な本などお知らせして、研究は二學期から始めることにしたのである。

休暇明けですぐ始めるつもりだつたが、大抵生徒の揃ふのを待つて十月一日に會員を募集したら文科百四十名、理科百三十名の應募者が現れた。それでエスペラント講習讀本と云ふ小冊を同十四日から博物教室で午の休みに、即ち零時半から二十分間づゝ、火木を理科として藤岡先生が、水、金を文科として澤瀉先生が受持つてやることにしたのである。時日の進むにつれて、倦き易いのさ——大体が

自習で十分な位易々たるものだから出席する人は段々減じては來たがそれでも合せて五六十名はやはり熱心によつてゐたのである。十一月に前の本を終つたので有名な獨逸の Theodor Storm の „Innenhago” と云ふ佛國製のきれいな本に移つた。そして現在に續いてるのである。

其間、三高や四高のエスペラント會から宣傳が來たり、日本エスペラント學會や協會などの通信があつたりして無名な研究會であつたのが、五高エスペラント會と名づけられてしまつたのである。最近白壁教授の赤い本を携へて講習に出席せられるのを見受ける。

斯くして私等が完成するまでには、出來なかつたが、とにかくエスペラントの如何に容易くおぼえられ、如何に便利なものであるかと云ふ事を、一般に紹介することが出來たことを藤岡、澤瀉兩教授の多大な御厚情を感謝すると共に大いに喜ばしく思ふ所である。

龍南を去る日の近づく時、自分の會に對する熱心の足りなかつたことをわび、新しい組織の下に大いに此の普及に盡力されん事を熱烈なる有志に願して一日も早く國際語の實際方面に活用されん事を切望してやまないも

のである。

理、三乙、安信則義（一九二二、二、一）

## 水泳部報

大正十年度五高水泳部日誌

前 委 員

四時の玄海は唐津の四時を彩るに十分であるノタリ／＼ごのたたる春の海から清澄整々たる夏海に變る頃には、無限に引き映ゆる虹の松原に抱擁せらるゝ唐津は淋雨の洗禮を受けて晏如たる一幅の畫に描き出される。颯て太陽次第に北し輝然たる銀球となつて、蒼穹高く懸る折さなれば、白砂に躍る陽炎は波に吞まれ、黒、白、黄の縞水衣が畫中に飛び廻る、その昔、松浦、佐用姫の戀のローマンズの舞臺たる此の唐津は寔に恵まれた佳境である燃ゆるやうな熱さ抑へ難き若さを持つて而も大阿蘇の煙や白川霽津の流れを唯一の友としてある武夫原の男の子は瑠璃色のやうな目を以て待ちあぐんでゐる大自然に渾身を掲げてぶつつかつてみたかつた。玄海てふ小自然の若人の抱擁の感激に浸つてみたかつた。茲に集ひ寄つた四十の同胞の活躍や自炊自治生

活の味は千鳥鳴く松浦瀉、寢醒涼しき鏡山なご結ひ合ひ絡みあつて、龍南三年の生活に意味ある光輝を放つてゐるものである。拙い筆で書き下す日誌はその眞相の萬分の一でも現はすことは出来ないだらふ、けれども又來る年に集ひよる友の參考にでもなれば意外の幸である。

本年度部員左の如し。

部長 野々口勝太郎先生

師範 宇土 寅雄先生

委員 小方次男、齊藤雄作

合宿 佐賀縣唐津高等女學校寄宿舎

部員（來唐順）

森本 春吉、森本 忠八、鬼塚 一男。

内野 孝、本田 敬之、東島 徹志。

中村 政男、宮本 義光、中島 勝巳。

藤本 季登、（東大）高柳民一郎。

谷崎 義一、藤村 次郎、守尾 盛秀。

岡 峻、森 孟芳、伊藤 功。

鐵富 鐵雄、張 義人、館林三喜男。

甲斐 瑞穂、辻 大輔、幸丸 正志。

坂口 忠男、竹原 東一、草場 信夫。

福永 親、上田 徹信、諸方 正人。  
平田 秀人、江副 武敏、阿賀 正美。

七月二十六日 晴

今年の前景氣の良いこと、云つたら全く水泳部開關のレコード破りだらふ。まだ開きもしない前日から時ならぬ寄宿舎に寢込んだ氣の早い人もあつた。紅に染つた陽が漸く領巾振山を離れて靜な軟い光を幸あれ顔に投げつけてゐる。學校側との交渉を済まし一通り準備を了へてホット一息。窓の外から四邊を見廻して見た。合宿は鋭齒も欺く眞砂子の上に浮いてゐる。すぐ北には蒼々しい磯馴松がその儘庭木となりて、その向ふには玄海てふ池が濤々としてゐる。南に擴がるグラウンドにテニスコート、ブランコ類の設備があり、所々に生優しい姫小松がビヨンビヨン緑をふいてゐるのも場所柄應はしい。肌觸りの良い風がスーと吹いて來て取り殘された風鈴がチン／＼と一しきり鳴る。ほんさにい、合宿だなと獨りて無闇に感心してみた、所へ東島君と料理人赤尾氏が來り込む、先づ五人で泳ぎに出掛ける除暮の洗禮を受ける。小方藤本二君を迎へて七人、例年の初日のメンバーは出來た。胸を撫でゝゐる處へ森本君一派の熊本グルッ

へ醬油滲んだ服に、例の焼杉、バツグミ毛布を胸に×字に組み大道狹しと乗り込んで来る「俺達ちや門潜る時恥かしくて赤面したぞ」と言ふかと思ふと委員殿飯はまだでござるかさ」腹を押へる。急に合宿が賑かになつたのはよかつたが面喰つたのは手前達。之の景氣ではどうなることやらと危惧三昧。それは祖先傳來の部質たる疑莫塵に數があつたからである。

#### 七月二十七日 晴

合宿第一夜の夢は掃々の響に破られた。翠い松の隙から吹いてくる涼しい朝風が緩やかに蚊張を掻めかしてゐる。飽くまで呑氣な自然生活に浸潤して自由の實を味はんとしてゐる吾々にも一度醒めた目をパチ／＼させて天井を見詰めてゐるには餘りに貴い氣がする。一同言ひ合はしたやうに起き上る、今日は波も静だし、蒸さるゝ程の暑さで泳ぐにはお誂へ。一團は赫々たる部旗を押して立て「柏の旗に風搖れて」の調子ゆかしく潮の如く合宿を流れ出た。濱邊に集く海客の視線は一時に、こちらの方へ送られる、その視線を潜りながら意氣軒昂天を衝く許りの得意顔に悠々乗り込む時の結構な氣持はさても部員でなくては味へ

ぬ代物だ。命の端舟も廻される、沖へ漕ぎ出して思ひ／＼に飛び込んで自由な稽古を始める、午後は西の濱から鳥島まで皆泳いだ、やつと一息奇岩に腰を卸して自然の佳境に詩操でもと思つてゐる所に青天の霹靂蒼空は俄然密雲に閉ざされ雨滴顔を掠む、一同急遽歸航着陸する頃はい雨霽れて強い光は、又もや吾々の五体に映ねた。之れ幸と肉聲の限りを張りあげて我部の示威運動を行ふ。舟を叩く、躍る、旗を振る、誰か二三名は感激の餘り海に落て込んだ。まるで全唐津を一氣に呑まんとするの概があつた、浴客は唯唯然として開いた口も塞がらぬ體。合宿に歸つてからはテニス、ピンポンに餘念がない。折々讀書してゐるものがある。殊勝なものださ感心してゐる間もなく駒々焉と肝が聞て来る。

こんな生活では日に三度の食事が之の上なく樂しものである。二六時中ウツと活動してウツと詰め込む、そしてチヨクツと出せば肥ゆるに決つてゐる、唯でさへ美味い自炊食事にゲルの許す限りの御馳走さきてゐるから熊本の下宿で鍛へられてゐる一同の食欲は厭が上にもあふられた。お櫃の底をカス／＼とやられる響は委員の頭には釘を打たる、鐵槌の

響を聞いた、今年の料理人は八幡餅の大隊長（本名は赤尾氏）だから西洋料理でも何でもやる、今日から料理の助手として寄宿舍附きの賄を頼んだ。

#### 七月二十八日 晴後曇

會員の所持金を集めて安全策として銀行に預金。午前の練習は西の濱に於て。一群の漁夫が網を引いてゐた。事あれかしと腕を鳴らししてゐる連中、先を競ふて綱綱に縋りつゝいた。拱手、腰部で引きながらヨイヨラと無意識的に掛聲を連發してゐる様は實際呑氣の極、嫌でも長命出さうである。聽て尾袋が近まる得體の知れぬ魚が黝く脊を重ねてゐる。オッサン一匹ハイヨウと返事もないのに鉈々掴んで逃げて来る。中には獵子の捨てた鱈の子を夫さも知らず大事さうに舟底に擴げ鬼の首でも取つたかのやうな自慢顔。轉んでも唯では起きぬ連中可なりのお蔭を得て引き返す。豫定外の勞働に腹はペコペコになつてしまつた餓飢道にでも追つばらばれたやうに食堂の入口に立ち塞がつて、委員殿後生だから早くして呉れと悲鳴を擧げてゐる者がある。かと思ふと、中には堪りかれて、梅干つかんで一杯前食ひして逃げ出す者もあつた。平時なら餘

つて仕様のない筈のお飯も無三に平け盡された。或る豪傑が杓子を笏よろしく捧げ持つて  
祇つてゐたのは如何にも物凄かつた。午后に  
入つて天候一變。ヤラムゝと冴へてゐた碧空  
は俄に模糊され一陣の疾風は砂を巻き上げて  
窓に吹きつけた。例の夕立だらふうと樂觀し  
てゐたが仲々霽れさうにもない。小降りな幸  
ひ、雨中の海水浴も一趣味だそ有志を募つて  
沖へ漕ぎ出した。颶風の後のやうな黄ろい空  
氣は満島に急ぐ帆の腹を一杯に張り詰めてゐ  
る。天より降す銀線は音もなく波に吸ひ込ま  
れて行く。虹の松原が幽に霞の中に隱見して  
ゐた。夜になつても雨は止まない。マンドリ  
ンやハーモニカの調子の愛狂しい程の魅力に  
一同森閑とした氣持になる。ローレライの挾  
るやうな調子が軒を廻る雨垂れの調べと共に  
靜な夕闇の中に消ゐて行く。騒々しい水泳生  
活にも斯うした詩情は寢に貴い慰安であつた  
七月二十九日 曇

晴

委員の手落によつて多數の會員を嘔吐の苦に  
陥らしめたことは寢に申し譯なき次第である  
七月三十日

例の體軀魁偉而も快々活々な先生も我等合宿  
にお迎へした時の皆の悦びは又格別であつた  
殊に柔道部優勝の餘韻を吾々水泳生活に迄注  
入せられるので合宿は俄に活氣づいて來た。  
早速西の濱で稽古を始める。先生の大きな身  
体では紛れもなくその要領が會得される。そ  
れでも流石の先生も大海の真中では倭小(少  
と言葉が非道いが)化されて見ゆるのはどう  
しても錯覺の罪だ。  
七月三十一日 曇

天氣が思はしくないので一寸弱つたが、今  
日は又々野口部長の御來援を受けて、一同は  
慈父を迎ふるの親しみに満ちた、之で陣容も  
完備した譯で唯天氣の恢復を待つばかりであ  
つた。

八月一日 曇

どうも天氣が變だし時折シボ／＼降つて來る  
ので一同脾肉の嘆に暮れてゐたが午後からは  
恢復の兆が見え出したので、之からの思ふ存  
分の活躍が豫想されて嬉しくて寢ても起きて  
も居られない、若人の誇に酔ふてゐた。之の  
間時々の晴間をぬすんでの水泳は又一種の内  
ンテレストを添へるのであつた。一面籠城中  
にも面白い滑稽、和氣變々たる諧謔の中に家

族的な、單純ではあるが而も飽きない生活を  
續くる。ことが出來た。

八月三日 晴

之の頃誰が言ひ出したともなく、ケツドホー  
プといふ言葉がお飯の菜になる程連發される  
やうになつた。その由來を研究して見るこ  
と一寸洒落てゐる、何でも西の濱に拾三歳位の  
可愛い少女が男勝りの元氣で泳ぎ廻つてゐた  
とやら、それが數奇家の目を惹いて離さな  
かつた。そしてそれが黄帽を被つてゐた所から  
黄帽希望ケツドホープトと轉用されてゐ  
たことが判つた。稽古は従前通り。

八月三日 曇

降りもせず照りもせずのゲーガラ天氣、ピン  
ボン、樂器の響、トランプの鯨波、テニスの  
カウンツ等色々の響聲に合宿も爲に鳴動して  
ゐた。巫山戯の中心として頸角を抜いてゐた  
Fといふ男があつた。松の樹が二本あれば夫  
婦松だそ云ひ、山があれば富士山と呼ぶ、餘  
り暢氣な自然生活に頭迄が逆行したと見えて  
仲々面白い連中が出來てきた、宇土先生熱々  
感心してミスター、シンプルの名を以て之等  
の男を呼ばれたのを筆頭に面白いニツクネー  
ムが流行し出して合宿はヒツクリ返る程の大

賑ひ。

午後、晴れさうになつたので端舟に分乗、虹の松原見物に出掛け思ひの證辭を連呼奉納して歸つたが例のシンプル君が夫婦松の多いのに感心しただらうとは後の笑草。

八月四日 晴

久しぶりに白い強い光が惠まれて瑞々しい緑が鮮かに映れてゐる。海は平たい面を鏡のやうに展べて、獵舟はひきもきらず沖へへへへと行つて行く、今日の豫定表には晝は鳥島の鯛の茶漬飯晩は宮島氏宅よりの招待といふことになつてゐる。鳥島まで皆泳いだが平時よりも馬鹿に早かつたことには全く舌を捲いた。鬼に角、玄海閣(?)に用意を命じた。腹が空いたと見えて、ゴロンと丸太様に寝るのにはよかつたが、中には生簀の魚を追ひ廻したり引き上げたりして興味がつてゐる。魚こそい、御迷惑様、愈かきこみの段になると、臍の緒切つて以來かゝる大牢の美味は始めて顔に猛烈な舌鼓が繰り返へされる。最後迄頑張つてゐたシンプル君その儘、海に轉げさうに膨れて居る。之の時野口部長御寄贈の西瓜が運ばれる。重れての御馳走に愈鼓腹壤土の體。夕方には吉岡舊校長を劈頭に長賜宮島家

の賓客と收まりかへる。あまりの饗應に一同大官にでも飛躍したやうに勿體顔にすまし、む、囁て椽上に佇んで唐津の夜景に見される。遠近に輝く點々の洋燈は涼しい風に洗はれ、松籟の調は海鳴りの響に浴け合つて折々さし來る潮の花が椽下に碎けて颯と面にかゝる。不知不識の間に時間は過ぎた、感謝の武夫頭を張り上げ乍ら引き上げた。

八月五日 雲

三哩遠泳遂行の日である。然し怪しい風が小氣味悪く吹いて來るし、船頭さんも今日は遠泳日和ではござらん云ふ。それでも刺す所四日しかない。愚圖々々してゐるさ何もかもオジャヤンになつてしまふ、冒險でも構はぬやれる所までやつて見ようさ評議が纏る。例年のコースと違へて、西の濱より濱傳ひに西唐津の方に廻つた。部員は案外元氣である。少し水温が低かつたこと、波が非道かつたことの爲に一同の苦戦は一通りではなかつた。結果は次の八名の成功者を得て萬歳裡に歸航。藤本。千本。本田。館林。東島。福永。江副。守尾。

午後干潮を機會に飛臺<sup>きあだい</sup>に蟻集して玄海をパツクに色の異なつた所を掃して來らん日の紀念に收

めた、直に西瓜取りの競技に移る。佐賀中學水泳隊の舟を拜借し二軍に分れて闘つたが結果いつも東軍の勝となつた。宇土師範のお情で敗軍も珍味に興ることは出来たが中には、西瓜のはいる餘地のない程ウツと潮を吞まされて居た者もあつた。茲で特筆しておきたいのは例の宇土先生である、西瓜割りにさ持ち出された鉋丁を羅漢をも生擒せんする怪腕にかい挟んで浴客の中を彷徨されるので面喰つたのはお巡りさん。拷問せんさすれば何だか先生らしい、それでも物騒だと唯兩眼をグルグルとしてゐる。先生何知らぬ體に「西瓜は何時食つても美味しいもんですれ」

八月六日 晴

波も静だし一般浴客も非常に、三井支店長の處へ七ツ釜見物にランチを貸して貰ふ様にと交渉に出掛けた。惡情にも支店長は留守なので又罷り出る旨告げて時間を見測つて又訪問。終に四回にまで及んだが毎度不在。明朝返答すべしとの沙汰。不安の中に引き返し未明の中に又々訪問、頑張りのおあつて快諾の言を得ることが出来たが吾ながら粘り強き執拗に苦笑せずには居られなかつた。

八月七日 晴



支店長の厚意によつてランチは女學校の裏に廻はされた。吉岡校長御寄附の一部で購はれたデカイ西瓜と兵糧を運びこみ西瓜の一つを船長に奉納して買収の心程である。コッソツ泳ぐ以外に進むことを忘れてゐた一同にはランチの進みは飛鳥のやうに思はれて、一瀉千里の快安を貪ることが殊の外嬉しくてならなかつた。天は飽くまで青みちぎつて、玄海は靜に大きなウネリを起伏させてゐる。婦夫岩の奇巖、軍艦島の細身を潜り抜けると渺茫無限の大玄海がパツと展開された。水天一碧ならんとする邊に烏帽子島が模糊として見ゆる。寔に大きな眺である。聴て七つ釜に着いた。玄海と直角をなして整然たる玄武岩の柱狀節理が眞直に水に落ち込んでゐる所に七つの洞窟を作つてゐる。奇觀たるは云ふまでもない。賞讃の辞も驚駭の言葉も實行して始めて咄嗟的に吐き出されると云ふより形容の仕方はない。洞中は薄だになく。水は蒼く澄んで奥は眞黒で何の音もない。森龍に慕さるゝ炎天の日も茲では思はず冷汗が滲み出る。鼻柱も揺かるゝ思ひにマツチを摺りながら、端舟は愈々奥へと進んだ。孔は左へ右へ屈曲して氣味悪い水のやうな水滴が天井から落ちかゝる。時折六角柱の極が變怪の顔のやうにつきかゝる。誰かが言つた傳説の大蛇が如實に這ひ出さうである。通り抜けの孔が一つある之中を一同尾頭相銜んで泳いで行く。まるで河童が水色薄絹を着てダンスでもやつてゐる様をつくり。可なりの時間を経過した。西瓜の御利益で田島神社までランチを進めることになつた。その社の御神體は世にも名高き上臈の典型たる佐用姫である。此處で西瓜も兵糧も平げられて一同は神殿の前面を左右に逍遙した。そして暑い陽を遮る高い蒼々たる古木を仰ぎながら柄にもない稚氣な座山戯に楽しんだ。夫君戀しさの餘り心も身も石化したと傳へらるゝ佐用姫の遺體なごを拜觀して歸着したのが午後の五時であつた。夜は自由亭にて閉會式といふ段取になつてゐる。鈴の合圖に野々口部長、宇土師範を先頭に長驅町内を練りながら會場へと流れ込む。日中の照付の爲にビールは譯もなく空にされる。前委員安住氏寄贈の和酒に一同は一段のメートルを擧げた。サイダーに酔ふた宇土先生、得意の浪花節に花が咲き、鉢軀にも似合はぬ、品のよい肉聲の獨唱の餘興は結構な氣分の一同をいやが上にも痛快三昧に引き入れた。之の

機を利用して、三井支店長井上氏宅へ謝禮のストームを奉納し續いて、翌日、宇土先生が酔漢の乱暴を懲らしてやつた件につき、ビール一打を謝禮に贈つた唐津の有志某宅へも序に奉納しておいたら、翌朝早速その御禮にさ又々燗酎一樽。

八月八日 晴  
天氣快晴、詭へむきの遠泳日和である。最後の日を飾るべき五哩突破の日に來た。整々たる磯馴松も二旬の名残りを惜んで低迷してゐるやうに見受けられる、弱い風が鏡の面を軽く撫でゝゐる。葛湯に水砂糖等用意万端整へ午前九時入水。森、福永兩氏を先頭に宇土師範より配置せられし遠泳隊形に順次續いた。水溫潮流共に申分なし。鰭振りて行く人魚の珠を探らんする體に滑にすんぐ進むばかり高島の磯にはヤラムと太陽炎が波打つてゐる千尋の碧の奥には黒い影が躍つてゐる。鳥島は何時の間にか尻邊に展開せられてゐた。されど天は永久に我に興せず、高島を廻らんとする頃より風波漸く不利となり、約半數の乗船者を出したるは遺憾だったが、葛湯に元氣倍加し荒れ狂ふ浪の腹を切り抜け頂を超へ二尋の深みに沈みつゝ、惡戦苦闘する十名の勇士

の面々には既に榮ある勝利者の色が溢れてゐた。黙々たる永き奮闘に隊形漸く非ならんとするや宇土師範の意を用ひらるゝこと切であつたが幸にも無事午後三時半本田、福永兩君を先頭に總ては再び、陸となつた。八名の成功者を中心に凱旋の紀念にカメラに収まる柏の旗や武夫原頭は暫しが圖は全唐津を鳴動させた。總て悠々合宿に引き返り最後のデインナーに腹を充し「五高水泳部萬歳」の歡乎の中に樂しかつた合宿生活最後の幕が華に卸された。尙五哩成功者左の如し。

本田。福永。江副。東島。藤本。藤村。幸丸。

三哩成功者と認定せられし者左の如し。

森本(春) 千本

× × × × ×

中途で數日間の雨天に出會した爲豫定の計畫の全部を實行することが出来なかつたのは返す／＼も遺憾であつたが、部員諸君が水泳部の歴史に鑑み、不肖委員の不行届にも拘らずその立場を了解して、痛快に、且つ虚心坦懷我が水泳部をして光輝あらしめ、意義深からしめられた事に關し感謝の意を表す、尙合宿を提供して戴いた唐津高等女學校長中野才治

氏がその特別の御厚意と便利さを惠與下されし事に對し吾水泳部の忘却する能はざる所衷心御禮申し述ぶる次第である、末筆ながら、一夕の饗宴に吾等の勞苦を忘れしめられたる宮島家に對し、茶菓料を御惠與あられと舊校長に對し部員に代りて囑腔の謝意を捧ぐ。

玄海を偲びつゝ東都にて。 S 生